

## このひと

日本分析化学会名誉会員になられる

池田 篤 治 氏

(Tokuji IKEDA  
京都大学名誉教授・福井県立大学名誉教授)

1942年京都市に生まれる。1965年京都大学農学部農芸化学科を卒業、1967年同修士課程を修了した。1968年京都大学農学部助手に着任し、1973年助教授に昇任するとともに農学博士(京都大学)を取得した。1980～1981年客員研究員として米国ノースカロライナ大学に留学した。1992年京都大学農学部教授に昇任し、1997年改組により農学研究科に配置換えし、2005年定年退職した。同年福井県立大学生物資源学科教授に赴任し、2010年に退職した。両大学より名誉教授の称号を授与された。この間、2001年「バイオエレクトロカタリシスに基礎を置く生物電気化学分析法」に対し日本分析化学会学会賞を受賞した。また日本分析化学会副会長、監事、日本ポーラログラフ学会会長などを歴任した。

池田篤治先生がこの度名誉会員に推薦されたことをお聞きして、私たち関係者一同、心よりお慶び申し上げます。

37年前、学部4回生として千田 貢教授の研究室に配属された私は、当時助教授の池田先生から、タンパク質のポーラログラフ測定の指導を受けました。当時は、電気分析法も、水銀電極から固体電極への過渡期であり、またバイオ関連分析に関心が持たれ始めた頃でした。池田先生は一貫してポーラログラフの考え方に基礎を置き、反応電流(触媒電流)を中軸に据えた研究を展開されました。1980年代には、タンパク質、特に酵素触媒反応の電気化学測定を中心とした研究を進められ、バイオエレクトロカタリシス(酵素触媒電流)の概念を提唱し、それを“酵素機能電極”として実現されました。当時、既に“酵素電極”という言葉が使われておりましたが、それはいわゆる第一世代のバイオセンサーに相当するものであり、その原理はここで言う酵素機能電極のそれとは大きく異なります。こうして新しい原理に基づく第二、第三世代のバイオセンサーとも呼ばれる酵素機能電極の研究が開始されたのです。

1994年、当時岐阜薬科大学におりました私を助教授として研究室に迎えてくださり、以後退職されるまで11年間、研究・教育を共にさせていただきました。この間、バイオセンサー以外に、タンパク質の酸化還元電位測定、酵素反応の速度解析や機構解析、微生物細胞を用いた機能電極の開発、微生物の増殖速度測定やエネルギー代謝機能解析、さらにはバイオ電池への応用など、広範な研究を展開されました。このような研究は、生化学の基礎研究分野に新しい分析法を提供するとともに、バイオセンサー、バイオリアクター、バイオ電池などの応用分野を切り開く方法論的基盤となりました。特に、開発当初から深く関与された血糖値センサーは、医療機関だけでなく、家庭においても汎用されるようになり、現在もその需要が広がり続けています。当時、このことについて池田先生は、「ポーラログラフ反応電流の原理に基づく血糖値センサーが、拡散電流の原理に基づく酸



素電極に次いで、広く一般に利用されるようになった」と、ポーラログラフをこよなく愛する研究者として感慨深くおっしゃっておられたことを思い出します。また、学生さんには、事あるごとに、反応電流が定常になることの重要性を強調されておられたことも鮮明に記憶しております。こうしたご研究の経緯は、“分析化学のあゆみ”(本誌、2010、606(2010))に詳しく述べられています。

池田先生は、研究・教育において、地位や肩書きに関係なく対等の立場で議論するという姿勢を貫いてくださいました。学生諸君の意欲的な実験や率直な疑問から新しい考えや研究展開が生まれることもあり、そのような学生諸君の寄与をきちんと評価されました。先生には、“お公家様”という愛称があったように、普段は大変おだやかなお人柄で、結果として研究室もいつも和やかな雰囲気になっていました。しかし一方では、対等の立場で議論をするときには、各自が常に目的意識を持って仕事を進めていることが前提であることを強調され、その意味では非常に厳しい一面を私たちはよく知っております。このような先生の姿勢は大学の管理運営、学会活動、学外業務などへの対応においても一貫しており、規則や形式よりも実状に応じた適切な対応を重視されておられました。

京都大学を退職されてからも研究室の大きなイベントには必ずご出席くださいます。そのような場で、いろいろお話を伺う機会がありますが、その中には池田先生のお人柄がよく反映されている話ができました。例えば；バブル景気にわいていた二十数年前、分析装置購入に特別予算が付けられたが、何故かその用途が外国製品に限られたこと；原発事故が起こった直後のバイオ分子工学の講義では、内容を変更して原子核化学の話をしたこと；競争とは、お互いが成長(切磋琢磨)することが本来の目的のはずなのに、相手を打ち負かすことであるような風潮が強まっていること；人権や憲法について、その内容を貶めるような流れが強まっていること；ローカリゼーションの大切さを展望できるような文化の継承と育成が急務であること；などなど。これからも健康にお過ごしいただき、私たち後進のご指導を賜りますようお願い申し上げます。

〔京都大学大学院農学研究科 加納健司〕

## このひと

日本分析化学会名誉会員になられる

木 曾 義 之 氏

(Yoshiyuki Kiso)  
(広島大学名誉教授)

1928年広島県尾道市に生まれる。1954年広島大学理学部化学科を卒業、鈴峯女子高等学校教諭、鈴峰女子短期大学講師を経て、1958年に広島大学理学部助手、1963年に京都大学原子炉実験所助手、1964年に京都大学原子炉実験所助教授になられた。その後、1973年広島大学工学部教授になられ、1992年同大学を停年退職、同年同大学名誉教授の称号を授与された。この間、1991年には「錯形成反応を利用する電気泳動法の基礎的研究とその応用に関する研究」により日本分析化学会学会賞を受賞された。

木曾義之先生がこのたび名誉会員に推薦されたとお聞きし、心よりお喜び申し上げます。先生は、先日85歳になられた。御退官後、あっという間に20年以上が経過してしまったというのが実感である。本稿では先生の素晴らしいご業績や才能の一端を紹介させていただき、御祝辞に代えたいと考えている。

木曾先生は尾道に生まれ、広島県立医学専門学校（現広島医学部）に学んでおられた間に終戦を迎えられたと伺っている。疎開されていて、幸い原爆にはあわれなかったそうである。終戦後、一時は医学を志されたようであるが、最終的には新制広島大学理学部化学科に学ばれた。当時ポーログラフイーの研究で有名であった品川陸明先生から分析化学に関する薫陶を受けられた。木曾先生は、品川先生のご指導の元、 $^{32}\text{P}$ を用いて「各種リン酸塩の放射化学的分析法の研究」で卒業論文を書かれ、1963年には「濾紙電気泳動法による錯体の安定度定数の新測定法」という題目で理学博士の学位を取得されている。その後京都大学原子炉実験所に転出され、リン化合物やセレン化合物のホットアトム化学反応による生成物の迅速分離に成果をあげられ、また、当時未確認の短寿命の核分裂核種を焦点クロマトグラフィーで単離(Rb, Cs, Sr, Ba, Br, Se, Mo, I)に成功し、その核種の半減期(6秒!~10分)、 $\gamma$ 線エネルギー及び相対強度比を求められた。1972年には、著書「ゾーン電気泳動：イオニクスの新しいところみ」を南江堂から出版された。残念ながら現在は絶版となっているが、基礎原理や錯形成による希土類イオン分離への応用など、極めて斬新な内容であり、現在でも関連の研究者のバイブルとして高く評価されている。

その後、広島大に移られてからも、竹味弘勝助教授や京大原子炉実験所の故玉井忠治教授と共に、かなりの期間、短寿命核種の研究に携わられたが、すぐに新しいプロジェクトや研究に着手された。プロジェクトは加速器設置計画、研究は島津製作所から装置が市販され始めた細管式等速電気泳動法である。

1968年頃の大学紛争を一つの契機として、広島大学



では広島市から東広島市(西条)への移転が計画された。京大から戻られた当時、木曾先生が所属されていた工学部応用理化学教室では、理学部と協力してサイクロトロン設置が議論され、たびたびワーキンググループの会合に出ておられたようである。1982年3月には工学部が先陣を切って移転を完了したが、サイクロトロン用の設置場所は確保されたものの、残念ながら予算は付かなかった。しかし、その場所には1996年になって、広島大学放射光科学研究センター(HiSOR)が設置され、多くの研究者に利用されている。

広島大学工学部において、木曾先生は、無機分析化学や分析化学などの教鞭をとられ、多くの優秀な卒業生を送り出された。筆者は1978年に木曾先生に助手として採用していただき、それまでの分子構造関係の研究テーマから離れて、等速電気泳動法の研究についてご指導を受けた。先生は計算予測が極めて重要であることを早くから認識しておられ、私には着任と同時に等速電気泳動の定常状態が計算できるプログラムを書くよう指導された。プログラムが動くようになると、色々な条件でモデルイオンの計算を行い、先生に計算結果をお伝えしたものである。当時一番びっくりしたのは、先生の持たれている「計算結果をグラフ化し、背景にある真理にたどり着くセンスの素晴らしさとそのスピード」であった。実は、先生は絵を書くのが大変にお得意で、それも正面切ってキャンバスにというのではなく、そのあたりの紙の端切れや、文章の空白に、さりげなくデッサンを入れる。絵のほうは真似ができなかったが、グラフ化については非常に多くを学ばせていただいた。また、科学史についても非常に造詣が深く、多くを学ばせていただいた。特にラザフォードほかキャベンディッシュ研究所が生んだ科学者達の物語や、核分裂の発見とか、そういう話題を酒の肴にして、学生達と大いに盛り上がったことが、昨日のことのように思いだされる。

今は会社等の最前線で活躍している卒業生達共々、先生にご指導を頂いたことを大変有り難く思っております。最後になりましたが、先生の今後のご健康を心から祈念致します。

〔広島大学大学院工学研究科 廣川 健〕

## このひと

日本分析化学会名誉会員になられる

瀬田 重敏 氏

(Shigetoshi SETA  
東京農工大学客員教授)

1937年長崎市生まれ。1960年東京大学工学部応用化学科卒、同年旭化成工業㈱入社。旭化成・取締役、専務取締役、特別顧問を経て2004年3月退社。同4月東京農工大学理事・副学長、同大学客員教授（現在）。2000～2002年日本高分子学会副会長、1999年～2010年日本化学工業会広報委員会委員長・顧問、1997～2001年化学技術戦略推進機構理事・評議員、2001～2004年環境省中央環境審議会臨時委員、2001～2010年環境省・環の国「化学物質と環境」円卓会議メンバー、2003～2011年産業技術総合研究所「戦略的研究拠点育成評価委員会」委員長・同「ベンチャー開発センター」顧問を務めた。日本分析化学会感謝状、「環境管理誌」優秀論文賞、高分子化学功績賞、東京農工大学感謝状を授賞。博士（学術）。

瀬田重敏先生がこの度名誉会員に推戴されましたこと、心からお慶び申し上げます。

瀬田重敏先生は東京大学工学部応用化学科工業分析化学講座で学ばれ、卒業後は旭化成工業㈱に入社されました。その後、同社専務取締役研究開発本部長や東京農工大学理事・副学長をはじめ、産学にわたって研究開発と教育の指導的重責を果たしてこられました。その間、ICASをはじめ本会の国際化に関連する諸事業や、企業等における分析事業部門の産業界における地位向上、環境問題における分析化学の位置づけなどに対して、高い見地から多大なる貢献をされてきました。特に1991年、2001年、2011年の三回にわたるICASや、日本分析化学会50周年記念事業においては募金・財務委員会において中心的な活動を担われ、数千万円の規模で同事業の財政を支えると同時に、それらの余剰金を当時の藤貫正事務局長とともに国際交流に関連する基金として固定資産化（現国際交流事業基金）され、以降三十余年にわたり本会の国際交流事業の財政基盤を築いたことは実にご英断であり特筆に値します。こうした本会へのご貢献に対して、本会からは感謝状が授与されています。また、産業界における分析化学関連人材や分析化学部署の地位向上については、旭化成ご在職時代から東京農工大学副学長時代の長きにわたり極めて積極的に取り組み、日本高分子学会副会長や化学技術推進機構理事などの公益的機関における要職時におかれても務めて分析化学関連人材を登用されてきました。その結果、化学関連企業における役職者の輩出や政府委員会における分析化学人材の登用などに大きな実績を残されています。さらに、化学産業における環境問題にも産学連携して積極的に取り組み、ここにも経団連環境部会、環境省円卓会議、総合科学技術会議専門委員会などにおいて分析計測分野を確固として位置づけてこられました。そのほかにも、JSTの「先端計測分析技術機器開発事業」の顧問など、国の分析機器研究開発事業にも様々な機会にご



貢献されました。

研究者あるいは教育者として本会にご貢献された方々は多数おられる中で、日本分析化学会という組織において国際活動の財政基盤を築かれたり、分析化学人材や分析化学技術そのものを産業や社会の中で高く位置付けされた実績とご貢献は、高潔なる人格と傑出した人望から築かれた極めて高い社会的信用に加え、科学技術に対する高いご見識と深いご洞察、卓抜した管理運営手腕を備えておられればこそであり、余人をもってはなし得ぬご貢献であります。

化学産業界における製造プロセスや環境プロセス、あるいはR&D戦略などにおける分析化学部門の位置づけについて「化学経済」などを中心に論じ、それらを総合して2005年には博士論文としてまとめ、東京農工大学より博士（学術）の学位を授与されています。この瀬田先生の博士論文は産業技術俯瞰論あるいは産業技術における俯瞰的視野から分析化学を学問的に位置づけた集大成と言えるでしょう。

さらに、分析化学の啓蒙普及に関係する貢献も殊の外大きく、ICAS2011においてはJAIMAと協力して高校生を対象とした先端分析機器体験学習の機会を設けられ、それを契機に若年層を対象とした教育活動に精力的に取り組んでおられます。また、環境と化学に関するご著書「明日地球が滅びようとも、今日、僕はリンゴの木を植える」は広島原爆死没者記念平和会館に登録公開され、訪れる人々に感銘を与えておられます。

以上のように、瀬田重敏先生は産学連携の取り組みを通じて、本会の基幹事業財務基盤の確立、化学関連産業界と環境課題における分析化学の位置付け、分析化学人材の登用と活躍への多大な貢献、さらに、分析化学の産業界と社会における啓蒙普及活動など、日本分析化学会と分析化学に大きく貢献され、本会名誉会員として推戴申し上げそのご貢献を顕彰するにふさわしく、ここにご紹介申し上げる次第です。

瀬田重敏先生のますますのご健勝を祈念申し上げ、引き続き後進に進むべき道を啓示くださるようお願い申し上げます。

〔東京大学大学院工学系研究科 北森武彦〕

## このひと

日本分析化学会名誉会員になられる

高 村 喜 代 子 氏

(Kiyoko TAKAMURA)  
(東京薬科大学名誉教授)

1931年東京に生まれる。1959年東北大学大学院理学研究科博士課程修了，理学博士学位を取得。同年東京薬科大学に赴任。1968年～1969年米国 Case Western Reserve 大学に博士研究員として留学。講師，助教授を経て，1971年東京薬科大学薬品分析化学教室担当の教授に就任，以後26年間にわたり分析化学の教育と研究に邁進。1997年に定年退職，同大学名誉教授の称号授与。1992年「生体関連物質の電気分析化学及び光分析化学的研究」に対し日本分析化学会学会賞，同年本会論文賞，2000年電気化学会功績賞，2008年FIA学術栄誉賞を受賞。1977～1978年日本分析化学会理事，1987年関東支部長，1994年副会長などを務めた。

高村喜代子先生がこの度日本分析化学会名誉会員になられることを，心からお喜び申し上げます。「メリハリの効いた講義で実に明快な説明をして解った気にさせる美人の女性教授」，46年前，筆者が初めてお目にかかったときの高村先生の印象でした。東京薬科大学の女子学生達は憧れて「才色兼備」，「ちょっとおっかないけど話してみると人懐っこく東北弁も出てすごく面白い」，「大学院でもトップの成績」，「やさしい旦那様とのオシドリ学者」など噂話で盛り上がっておりました。その後幸運にも筆者は高村先生の下で実験助手の職をいただき，以来，上司として研究に教育に，さらには生き様において多大なご指導をいただいております。

1971年に，お父様の（故）加藤多喜雄東北大名誉教授が東京薬科大学にみえたことがありました。高村喜代子先生の教授昇格のお祝いに，お母様の作品である金箔の背景に芥子を描いた日本画を持参されました。お母様の「千代子」のサインまで美しく，娘のこの日を感慨深く迎えられたご両親の気持ちが窺えました。お父様は日本分析化学会の会長も務められ，戦後の工業分析化学を牽引されたお一人。父と娘の会話には，“これから思う存分分析化学を愉しめる”喜びが籠もる，ゆったりとした時間が流れていました。終戦のとき先生は旧制女学校の2年生でした。かつての日本の学校教育制度には男女間に格差があり，しかも戦前戦後の混乱の中で先生が幾つかの困難を乗り越えてこられたことを，当時の筆者は知る由もありませんでした。戦時中は空襲に備えて厳しい灯火管制のため，毎夜汚いパラフィンに浸したぼろ布に灯をともして勉強したこと，旧制女学校の教科書レベルは男子の中学校よりかなり低かったので東北大学入試受験に際しては想像を絶する猛勉強をしたこと，などを先生の退職後に伺い，頭が下がりました。

先生は東北大学理学部大学院理学研究科在学中，無機化学講座の田中信行教授の下でポーラログラフィーを主な計測手段として錯体の反応を研究されて，1959年に



「金属-EDTA 錯体の反応に関する平衡論および速度論的研究」により理学博士の学位を取得されました。この電気化学，錯体化学との出会いが，先生の電気分析化学および分光分析化学を主な領域とした「生体関連物質の高性能分析法の開発と応用」に関する研究に繋がっています。東京薬科大学に着任されて有機化合物のポーラログラフィーに精力的に取り組み，特にキノンの電解において非緩衝液中で微量の酸の存在が還元前置波を生じることを見いだしました。これが酸の定量分析や酸センサー開発の発端となっています。電気分析法を主軸にした研究から電極界面における情報取得の必要性を痛感した先生は，1968年米国 Case Western Reserve 大学の Yeager 教授の下に留学され，通常の電位走査法で電解中の固体電極界面に光を投じて，電極界面吸着種を *in situ* 計測する鏡面反射法を，1970年，世界で初めて実現しました。また，過酸化水素を生体関連物質分析の一つのキー物質と考え，臨床現場では吸光光度法が繁用される点を考慮して，微量過酸化水素の分析試薬の開発に積極的に取り組みました。チタン-ポルフィリン試薬など，数多くの定量分析試薬を開発し，その応用は環境・食品・生体成分分析分野に及びました。

さらに驚くことは，先生は定年退職後傘寿を超える今日も研究を推進されております。「チタン-ポルフィリン試薬が過酸化水素のみに特異性が高いのはなぜか？」過去の実験結果から生じた疑問をなんとか解決したいと思った先生は，喜寿を超えてから東北大学松本高利博士の協力を得て，計算化学に基づく研究を始められました。その成果は分析試薬の特性解明に関する内容で，今年お年間数回にわたる国内外の学会発表や，毎年の原著論文発表を続けておられます。

「勉強も研究も知的好奇心に駆られて行うもの。この本質は何かを追及することが大切である。それが分かった時の感動が人生を豊かにする。」と先生はいつも学生たちに伝えていました。自らそれを証明するのが先生の姿であります。これからもますます豊かに歩んでいただき，今後とも後進にご指導を賜りますようお願い申し上げます。

〔東京薬科大学薬学部 楠 文代〕

## このひと

日本分析化学会名誉会員になられる

中原 武利 氏

(Taketoshi NAKAHARA)  
大阪府立大学名誉教授

1965 年大阪府立大学工学部卒業。1968 年同大学院博士課程中退。同年大阪府立大学工学部助手。1972 年同講師。1985 年同助教授。1993 年同教授。2000 年同大学院工学研究科教授。1972 年工学博士(大阪府立大学)。1976~1977 年カナダ・カールトン大学留学。2005 年定年退職、大阪府立大学名誉教授。1974 年日本分析化学会奨励賞受賞。2003 年日本分析化学会学会賞受賞。Appl. Spectrosc. (副編集長), J. Anal. At. Spectrom., Spectrochim. Acta, Part B, Microchem. J., Can. J. Anal. Sci. Spectrosc. 編集委員歴任。

中原武利先生は、大阪府立大学工学部を御卒業後、同大学修士・博士課程に進学され、同大学にて助手・講師・助教授を経て、大阪府立大学工学部応用化学科分析化学研究室の 4 代目の教授にご就任されました。

中原先生のご研究は、当初は連続流れシステムを使った吸光度分析(今でいうフロー分析)であったそうですが、大学院進学時に固体の発光分光分析のテーマに取り組み、それを契機に原子吸光分析をはじめとし、原子蛍光分析、プラズマ発光分析、ICP 質量分析など、原子スペクトル分析を中心にご研究を展開されました。ここでは主に、測定の高感度化に必要な不可欠な試料導入法として、水素化物発生法や水銀の還元・気化法、揮発性化合物への変換・気化法等、様々な方法を開発されました。これらの研究成果は既に、2003 年の本会学会賞「原子スペクトル分析における気相試料導入法の開発と応用」にて評価され、そのほかにも日本金属学会学術貢献賞(2003 年)、日本環境化学会環境化学功績賞(2005 年)も受賞されておられます。また、それらの成果の一部は公定分析法の中にも取り入れられており、社会的にも多大な貢献をされておられます。中原先生は著名な学術雑誌である Journal of Analytical Atomic Spectroscopy, Spectrochimica Acta Part B (Atomic Spectroscopy), Applied Spectroscopy, Microchemical Journal, Canadian Journal of Analytical Sciences and Spectroscopy などの編集委員を務められ、御執筆された論文も実に約 200 編を数えます。

このような中原先生の御業績は、研究室における日々の学生教育とも密接にかかわっていると思われます。ある中原研 OB の方からは、中原先生は学生の教育に大変厳しくかつ情熱的に取り組んでおられたと伺いました。その方曰く、「日々の生活は修行だった」(?) との笑い



話も伺いましたが、その OB の方が卒業後にそのお話を中原先生にされたところ、「〇〇くん、私は何も覚えておらんのだよ!」と言われて拍子抜けであったそうです。ただ、そのお話をされる OB の方のご様子は、「その教育あってこそ今」を実感しておられるように思えたことが私には印象的でありました。

中原先生は本会の運営においても要職を務められ、1997 年には日本分析化学会近畿支部長、2001 年には日本分析化学会副会長、2002 年には監事を務められました。そのほかの学協会においても日本鉄鋼協会評価・分析・解析部会長、プラズマ分光分析研究会会長、日本分光学会関西支部長、関西分析研究会委員長など、組織を纏めるための重要なポストを歴任されておられます。また、中原先生は、本学応用化学科の OB 会である応化会の運営にも積極的にご協力くださっています。最近、OB 会の運営にかかわるスタッフも世代交代が進み、過去の経緯や状況を御存じの方々が少なくなっておりましたが、中原先生は幹事会等でも過去の御経験とその高いご見識に基づいた前向きなご意見を述べてくださり、若輩の我々をフォローしてください。

中原先生は 2005 年にご定年退職された後も、和歌山県廃棄物処理施設専門委員会委員長、和泉市環境審議会会長、河内長野市公害防止対策委員会委員長として地域社会へ貢献され、また、近畿の産学官交流を推進するべく分析技術研究会を主宰され、分析化学の発展・普及に尽力されておられます。

以上のように、中原先生は研究・教育・学会運営・社会貢献を含め、分析化学分野の発展に大きく寄与してこられました。今後は名誉会員として、大所高所より本会へのご指導・御助言賜れば若輩の我々にも助けになるかと存じます。今後とも、何卒ご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。

〔大阪府立大学大学院工学研究科 久本秀明〕

## このひと

日本分析化学会名誉会員になられる

保 母 敏 行 氏

(Toshiyuki HOBO  
東京都立大学名誉教授)

1940年東京に生まれる。1968年に東京都立大学大学院工学研究科博士課程を修了後、同大学助手に着任した。1974年～1976年米国メリーランド州立大学に博士研究員として留学し、1985年東京都立大学助教授、1987年教授となり、2003年定年退職し名誉教授の称号を授与された。この間、1998年「クロマトグラフィーのための分子認識型分離システム」に対し日本分析化学会学会賞、1993年と2001年に分析化学論文賞を受賞した。ガスクロマトグラフィー研究懇談会委員長、「分析化学」編集委員長、日本分析化学会関東支部長、日本分析化学会副会長などを歴任し、2000年にはASIANALYSIS VIの実行委員長を務めた。

保母敏行先生がこの度名誉会員に推戴されたことをお聞きし、心よりお慶び申し上げます。荒木(峻)研究室の先輩で私の在学中には先生が米国留学しておりお教え頂くことができませんでした。卒業後企業に入って10年ほど経った頃、研究室と会社両方の先輩である浅野泰一さんに荒木研のOB会に誘われ、これを機に幹事と連絡役となり研究室に出入りするようになりました。ガスクロマトグラフィーを応用した研究開発の中で、超臨界流体クロマトグラフィー(SFC)と抽出(SFE)に興味を持ち、1985年に装置化を手掛けてすぐに先生に教を請いに伺いました。先生の研究室には田口 正さんがキャピラリーカラムを用いた米国製の市販装置を持ち込み研究していましたが、保母先生は、私が手作りの試作機でとったデータの説明などを丁寧に聞いてくれました。すぐ、学生の研究テーマとして取り上げて頂き、その後ガスクロマトグラフィーの分野も含めてご指導頂き、共同研究など行うことになりました。先生とは1991年にユタ州のパークシティというスキーリゾートで開催された超臨界流体の国際学会に田口さんと3名で発表に行き、これを機に数々の国際学会に同行させて頂きました。学会では先生から最先端の研究、研究の背景や歴史、研究者の関係等国内では得られない貴重なお話を直接教え頂き、先生の学識の深さに感銘するとともに、新しい発想や発見を素直に評価される姿勢に感銘を受けました。先生は国際学会で時間が空いたときには積極的にハイキング、観光、美術館や博物館めぐりなどを楽しまれ、見聞を広めて交流の話題とされていました。ご一緒させていただき、学会は自分の研究成果発表だけでなく、質問や何気ない会話から交流を深め、いろいろと意見交換し見聞を広める場であること、人との繋がりを広める場であることを学ぶことができました。

先生の研究の中心となるテーマは「分子認識をめざした分離と検出手法の開発」ということで、手法の開発に力を入れたと伺っております。研究に臨む姿勢は常に



「創意工夫と新しいアイデアの実現」を重んじ、実際に手がけられた研究の幅はとて広く、ガスクロマトグラフィーにとどまらず、化学発光分析、フローインジェクション分析、 $\mu$ ガスセンサー、キャピラリー電気泳動分析、超臨界流体クロマト・抽出、高速液体クロマトグラフィーなどの研究とその応用などで多くの研究成果があります。先生はガスクロマトグラフィー関連のJISや排ガス関連JIS、ISO国内委員会委員長、各種委員会委員長、日本分析化学会常議員や内部の各種委員会委員を歴任され、研究指導以外の公務も多忙でした。忙しい中でも学生の指導を丁寧にされており、学会発表の前は発表練習で双方が納得いくまで指導をされておりました。また、ガスクロマトグラフィー研究懇談会では長年にわたり、正しい用語の使い方や基礎を理解しよりよい応用につなげるための指導を続け、社会に出てから勉強し直す方々の教育を行っております。

海外との研究交流も活発で、研究室にはたいがい留学生がおりました。奥様ともども留学生の生活面を支え、公私ともに研究環境を整えるよういろいろと心を尽くされておりました。留学生たちからは日本のお父さん・お母さんと慕われて卒業後も交流を大事にされております。1996年には卒業生たちの発案で荒木 峻先生80歳を記念して研究室の学生を海外に派遣する海外協力基金が創設され、先生の指導で多くの学生たちが海外経験を積む機会が与えられました。お酒の好きな先生の研究室では、飲みニケーションを通じて卒業するとお酒がたしなめるようになると評判でした。卒業後も気軽に研究室を訪問できる暖かい雰囲気は先生のお人柄の賜物と思います。退職されてからは、海外の学会に奥様を同伴される機会も増え、仲の良いお二人が参加されることで会も盛り上がりを見せております。

保母先生に師事された方々のなかで私がこのような執筆をさせて頂くことは恐縮ですが、人とのつながりを大切にし、在学中に大いに見聞を広め人との繋がりと研究の楽しさを学んだ卒業生を多数社会に送り出した実績は誰しも認めるところだと思います。今後も、奥様ともども後進のご指導を賜りますようお願い申し上げます。

(御産業技術総合研究所 前田恒昭)